

「のだ」と「것이다」の對照研究

－文法化の度合いの違い－

崔眞姬*

目次

- はじめに
- 先行研究の問題点
- 文法化における「のだ」の分類
 - 「のだ」の文法化
 - 文法化における「のだ」の分類
- 文法化における「のだ」と「것이다」の分類
 - 「것이다」の文法化
 - 「のだ」と「것이다」の對應關係
 - 「のだ」と「것이다」の機能別必須性
- 「のだ」と「것이다」の文法化の度合い
- 今後の課題

1.はじめに

日本語の「のだ」は、構造的には「の」によって文を名詞化した形式であり、文法化した形式である。「のだ」は、中國語、スペイン語、韓國語などの「のだ」の對應表現に比べ、その使用頻度の高さや機能の多様性に特徴が見られる。本稿の考察の對象は、日本語の文の文末や節末に用いられる「のだ」形式である。「んだ」「のです」「んです」「のである」「の」といった形式をとる。

「のだ」に對應する韓國語の代表的表現としては「것이다」がある。「것이다」は、形式名詞「것」に指定詞「이다」が付いて形成されており、文法化した形式である。構造的な面からも、機能的な面からも「のだ」に類似している表現である。しかし、「のだ」と「것이다」は會話文において對應しない場合が多く、兩形式の使用條件は異なる。具体例をあげる。

* 한밭대학교 강사

- (1) ジョンア 「(荷物を見て)これ、何？」
 정아 (짐 보고) 너? 뭐야 이거?
 유진 「わたしどうせ会社首になると思うから、早めに荷物をまとめているよ」
 유진 나 어차피 찢릴 텐데 일찌감치 짐 싸는 거야.
- (2) 미니ョン 「前略(ユジンを見て)・・・もう一度戻りたいな」
 민형 전략 (유진을 본다) ... 다시 돌아가고 싶어요.
 유진 「(このままでは涙が出そうですばやく) 今日、チェリンに會ったんです。」
 유진... (그러다가 눈물 날 것 같아 얼른) 오늘 채린이 만났어요.
 미니ョン
 민형
 유진 「(미니ョンの視線を避けて)チェリンにはミニョンさんのことがとても好きなんです。辛がっている様子・・・氣の毒でした。わたしさえいなければ、ミニョンさんとずっと付き合っていたはずなのに・・・」
 유진 (민형의 시선 피하며) 채린이가 민형씨 많이 좋아해요. 힘들어하는 모습... 안돼 보였어요. 나만... 아니어도 지금까지 민형씨랑 잘 지냈을텐데...

(1)は荷物をまとめているユジンにその理由を聞く場面である。その状況と関係づけて首になると思って荷物をまとめていると説明している。(1)では「のだ」に「것이다」が対応している。一方、(2)では「のだ」に「것이다」が対応していない。(2)は二人は別れており、「ミニョンは戻りたい」と言っているが、ユジンは別の話を切り出している場面である。また、聞き手にわからせるために「チェリンがミニョンのことが好きだ」という既定の事態を提示している。このように先行文脈と状況に關係しているとは考えにくく、話し手が話題を轉換させるために聞き手が知らない既定の事態を提示している。

(1)は先行文脈と状況の關係づけが明確であるが、(2)は先行文脈と状況の關係づけが明確ではない。このように先行文脈と状況の關係づけの度合いによって、「のだ」と「것이다」に差が生じる。

本稿では、文法化における「のだ」の機能を分類し、「のだ」と「것이다」の対応關係を明らかにし、「のだ」と「것이다」の使用條件の違いを考察する。

2. 先行研究の課題

宋承姫(1998)は「のだ」と「것이다」が用いられる事態の客観性の違いに注目し、「のだ」は個別的事象を「것이다」は一般的事象を表すと分けている。一般的事象は典型的な一般的心理、社

會的習慣、規範であり、「것이다」は自然に用いられるが、個別的事象は話し手がある特定の状況において獨自に認識した事柄であり、「것이다」は用いられないと述べている。

(3) 태양은 동쪽에서 뜨는 것이다.

太陽は東から昇るのだ。

(宋承姬1998:270)

(4)あの、實は、私・・・韓國人なんです。

저, 실은 저 한국 사람입니다.

(宋承姬1998:271)

本稿では、個別的事象であるか否かは「것이다」の使用を左右するものではないと考える。次の(5)のように個別的事象であるが、「것이다」が用いられる例があることから宋承姬(1998)の指摘が不十分であることがわかる。

(5)結婚できない。私たち兄弟だったのよ。

결혼할 수 없어. 우리는 형제 있던 거야.

このように先行文脈や状況と関係つけて個別的事象を既定の事態として提示する場合には「것이다」が用いられる。従って、個別的事象であれば「것이다」が用いられないというわけではない。

印省熙(2003)は「것이다」について、根據に基づく推量を行い、確信のある判断をする機能を持つが、話し手の心情と事實をのべる文の「のだ」には対応しないと指摘している。

(6) (前略)おれはそのたびに横っ面を張りとはしてやりたくなるのだった。

나는 그럴 때마다 따귀를 갈겨 주고 싶은 충동에 사로잡히곤 했다.

(印省熙2003:41)

印省熙(2003)が言うように、「것이다」は用いていない。しかし、この場合「것이다」を用いることもできる。心情や事實を述べる文すべてに「것이다」を使用できないわけではない。先行文脈や状況と関係つけて心情や事實を述べる文では「것이다」が用いられやすい。「것이다」の使用において先行文脈や状況との関係づけという要因が重要であると考えられる。

本稿では、「のだ」に比べ、「것이다」は文法化が進んでおらず、モダリティ形式として發達していないため、文を先行文脈と状況と関係づけやすいか、関係づけにくいかによって「のだ」と「것이다」の使用に差が生じると考える。

3. 文法化における「のだ」の分類

多くの先行研究では、先行文脈や状況と関係つける「のだ」は基本的機能として、先行文脈と状況と関係づけにくい「のだ」は周縁的・派生的機能として扱われてきた。しかし、いずれも準体助詞「の」が名詞化することによって、準体助詞「の」+指定詞「だ」が文法化していく過程で生じた機能であり、文法化の度合いが異なるにすぎない。従って、本稿では先行文脈や状況と関係つける「のだ」、先行文脈と状況と関係づけにくい「のだ」、どちらかを基本的機能とすることは適切ではないと考える。

3.1 「のだ」の文法化

Hopper&Traugott(1993)によると、文法化(Grammaticalization)とは語彙的要素が特定の用法において文法的要素になったり、文法的要素がより文法的になったりすると言語変化の一種である。文法化のプロセスは一方方向性を持つという。文法化の意味変化の方向性が一定の方向に向かって起る傾向があり、逆行することはないと考えられている。Traugott(1998)はこの特徴を一方方向性仮説(hypothesis of unidirectionality)とし、この一方方向性仮説を裏付ける言語現象として、次の三つを挙げている。

- 意味の漂泊化(Semantic bleaching)
- 脱範疇化(Decategorization)
- 語用論的強化(Pragmatic strengthening)

意味の漂泊化(Semantic bleaching)は内容語としての元の意味が希薄になり、消失されることである。例えば、「という」の例である。

- (7) 彼はお金がないと言う。
- (8) 北海道ではもう雪が降ったというニュース

(7)は本来の「言う」の意味で、誰かが発話したことである。「と」と「言う」は分離できる。しかし、(8)は「という」が一語化しており、「発話した」という意味を持たなくなっている。(7)の「言う」は述語の機能であるが、(8)の「という」は「発話する」の意味ではなくなり、連体修飾の機能を持つようになっていく。このように、文法化が進むと、本来の動詞カテゴリーから逸脱し、接續詞的役割を果たすカテゴリーへ移行する。これが脱範疇化(Decategorization)である。

「の」はもともと実質の意味を持たないため、前接する語を代用することで意味を持つ形式で

ある。「の」は意味の漂泊化が見られないが、文法化が進むと準体助詞カテゴリーから逸脱し、モダリティカテゴリーへ移行する。

「の」の脱範疇化の例を挙げる。

(9) 空を飛ぶのが私の夢だ。

(10) 彼はいない。死んだのだ。

(9)は「空を飛ぶ」部分を名詞化しており、「のが」は「の」+「が」で分離される。(10)は「彼はいない」という事態の意味として「死んだ」ということを関係づけて提示しており、「のだ」は一語化している。「のだ」は一語化して、「説明」しようとする話し手の心的態度を表す「のだ」である。

そして、語用論的強化(Pragmatic strengthening)はある表現がある状況の下で、実際に使用する際の話者の解釈が次第にその語の意味に取り込まれてしまうことである。

(11) 行け、行け、行くんだ！

(12) 横断歩道を渡るとき車に気をつけるのよ。

(11)は命令の場面で、「のだ」が用いられることで話し手の命令の氣持を表現している。(12)は教示の場面で、子供に「車に気をつける」という望ましいことが一般的に定まっていると提示している。

このように文法化において意味が主観的な方向に変化することを、Traugott(1998)は意味の主観化(Subjectification)と呼んでいる。もともとは客体的に捉えられる實質的な内容を持った語が、文と文の連結、つまりテキスト形式にかかわる接續詞的な役割を果たす語へと変化し、最終的には命題に對する話者の心的、もしくは推論的態度を表す語へと変っていくとする仮説である。

命題的(概念的)内容 (Proposition)

→ テキスト連結機能的內容(Textual)

→ 話者態度表明的内容(Expressive)

☒ 主観化(Subjectification)

本稿ではこのような特徴から「のだ」を文法化した形式であるとみなす。

3.2 文法化における「のだ」の分類

本稿では「のだ」の様々な機能を文法化の過程にそって分類する。「のだ」に含まれる準体助詞「の」は實質的意味を持たないが、「のだ」が文法化する過程に従って、その機能や使用範囲を擴張してきたと考える。

「のだ」は構造的には「の」によって文を名詞化した形式であり、文法化した形式として意味的には既定の事態を表す。「のだ」は文法化に従い、「具体的意味から抽象的・主観的意味」へ、「文レベルからテキスト・談話レベル」への意味変化が見られる。

「のだ」は「名詞化の機能」→「文連結の機能」→「態度表明の機能」という過程を経て、機能が擴大されていく。いずれの機能も準体助詞「の」+「だ」が文法化していく過程で發達した機能であり、文法化の度合いが異なると考えられる。各機能は連続性を持つ。

名詞化の機能は客観的に事態の内容を表す命題レベルであり、文連結の機能と態度表明の機能は主観的態度を表すモダリティのレベルである。このうち、文連結の機能は文と文を関係づけると同時に、話し手が事態をわかりやすく伝えようとする心的態度も表現される。従って、文連結の機能は名詞化の機能と態度表明の機能の間に位置づけられる。

名詞化の機能を担う「のだ」は、動詞文・形容詞文を「の」によって名詞化することで、對比性を持たせる。命題の成立にかかわる文要素に焦点が当てられており、それと對立する要素が否定される。焦点の該当要素と對立する要素を否定することで、話し手の伝えたいことを適切に表現することができると考えられる。名詞化の機能を担う「のだ」はスコープの「のだ」¹⁾である。

(13) 私たちは別れるのではない。しばらく離れるのだ。

(14) 彼にあげたのではない。彼女にあげたのだ。

(13)は事態のあり方に焦点が当てられており、ある事態の解釋として「別れる」は正しくなく、「離れる」という解釋が正しいと表している。(14)は行爲の對象者に焦点が当てられており、對象者は「彼」ではなく、「彼女」だということを表している。このスコープの「のだ」は完全に一語化されているとは言えない。野田(1997)が述べるように、スコープの「のだ」は「の」、「だ」がそれぞれの持つ機能が変質することなく使われており、「の」+「だ」に近いものであると考える。

名詞文の場合、もともと對比性を含んでおり、名詞文に「のだ」を必ず用いる必要はない。例えば、「私は學生だ」といった場合は對立する「私は會社員だ」は成立しないことが含意され、「私は學生ではない」といった場合は、「私は會社員だ」といった事態が成立することが含意される。名詞文に「のだ」を用いる「私は學生なんだ。」は自分が學生であることをことさらに提示する

1) 野田(1997)は、スコープの「のだ」は名詞化の機能をもつ「の」+「だ」という組成のままに近く、完全に一語化していないと述べている。

必要がある場面で發話しており、話し手の心的態度を表すために「のだ」が用いられたと考える。

しかし、名詞化する機能の「のだ」には對立性の意味合いが消失しており、「の」+「だ」に分析できない文連結の機能を担う「のだ」も見られる。文連結の機能を担う「のだ」を文連結の「のだ」と呼ぶ。文連結の「のだ」は構文的には文を名詞化し、それに加えて文を先行文脈や状況と關係づけられていることを示す働きがある。

(15) 顔が赤いなあ。お酒を飲んだなあ。

(16) (テーブルの上に日本のお菓子を見て)
日本へ行って来たんだ。

(15)は聞き手の顔が赤い理由として「お酒を飲んだ」ことを提示しているとき、「のだ」が用いられる。(16)は日本のお菓子を置いてあるのと關係づけて、誰か日本へ行ってきたことを推論しているとき、「のだ」が用いられる。このように話し手が伝えたいことをわかりやすく表現するために、「のだ」が用いられる。

文連結の機能では名詞化の機能が持つ對立性の意味合いが希薄化しており、名詞化の機能より文連結の機能のほうに「のだ」の關係づけの範疇が擴大されている。名詞化の機能では對立の關係づけに限られているが、文連結の機能では事情・理由の説明、言い換え、具体化、推論などの關係づけが見られる。つまり、スコープの「のだ」より文連結の「のだ」のほうが文法化の過程において進んでいるのである。

そして、文連結の機能をさらに擴大し、話し手が状況を把握し、事態を推察した判断に基づいて話し手の心的態度を表明するために、「のだ」を用いることができると考えられる。「のだ」の機能中、話者の態度表明の機能を最も文法化が進んだものとして考える。態度表明の「のだ」は文を先行文脈や状況と關係づけているとは捉えにくく、「のだ」を用いることで、談話的状況において話し手の心的態度を表すことができるため、態度表明の「のだ」と呼ぶ。態度表明の「のだ」は語用論的に強化された表現である。語用論的強化とはある表現をある状況の下で實際に使用する際の話者の解釋が次第にその語の意味に取り込まれることである。態度表明の「のだ」の例を挙げる。

(17) いい子は早く寝んですよ。

(18) 雨が降っているんだ!

(17)は一般的常識のために、従ったほうが望ましいという話し手の意図から「いい子は早く寝る」という既定の事態を提示している。(18)は「雨が降っている」という既定の事態を氣づいたことを表現している。「雨が降っている」は目の前の状況をそのまま描寫するものであるが、「のだ」

を用いることで、話し手の事態に対する解釈が表されている。このような「のだ」は特定の事態と関係づけているとは考えにくく、話し手の心的態度や発話状況で話し手のなんらかの意図を表すために、「のだ」が用いられるのである。

氏家(1992)によると、態度表明の「のだ」文は江戸期にあまり出現していなかったという。つまり、通時的にも名詞化の機能と文連結の機能のほうが先に現れ、話者態度表明の機能へ拡大していると考えられる。

4. 文法化における「のだ」と「것이다」の比較

4.1 「것이다」の文法化

김연주(1996)は通時的に「것」の機能が拡大していくとし、「것」を二つに分類している。

「것1」：派生語のように先行形式に名詞性付与

「것1」：語彙的意味を付与

「것2」：先行形式と密接に結合する

「것1」：命題全体に叙法的意味を付与

(김연주 1996 : 201)

また、「것1」は先行形式と後行形式との結合に制約がないが、「것2」は先行形式と後行形式との結合に制約があるという。このように統語的制約が多くなるということは語彙的機能から文法化が進んだのだと考えられる。

「것1」と「것2」の例を挙げる。

(19) 그가 벌어들(인/ 이닝/ 알) 것₁이 엄청나다.

彼が {稼いだ/稼ぐ/稼ぐ} のはすごい。

(20) 그가 벌어들인 재산은 엄청날 것₂이다.

彼が稼いだ財産はすごいだろう/のだ。

(19)の「것1」は語彙的意味の「財産」を代用し、先行形式との結合に制約がない。(20)の「것2」は未来を表す連体形「ㄴ」に「것」と「이다」が結合し、一語化した表現であり、推測・説明のモダリティ機能を持つ。

이승녕(1976)も中世韓國語の「것」の研究で、「것1」は15世紀に生産的であったが、16世紀になって、モダリティの機能を持つ「것2」が発達していると述べている。「것이다」は「のだ」のよう

に通時的に文法化が進んでいるのである。

また、「것이다」は先行形式のテンスによって、文法化の段階が異と考えられる。안주호(1997)は韓國語の名詞の文法化を3段階に分類する。第1段階は依存名詞の段階、第2段階は接語化(clitic)段階で、第3段階は語尾、助詞、接尾辭化の段階で、機能語がより機能語に変わると述べている。

「것이다」の文法化段階の具体例を挙げる。

(21) 依存名詞

내가 {한/하^는/할} 것은 숙제다.
私が「した/する/する」のは宿題だ。

(22) 接語化(clitic)段階

나는 숙제를 {한/하^는} 것이다/ 거다.
私は宿題を「した/する」のだ。

(23) 接尾辭化

- ① 나는 숙제를 할 것이야/ 거야/께.
- ② 私は宿題をするのだ/の。

Narrog(2002)は通時的にモダリティ形式から動詞活用の語尾へ変わると述べている。(23)の「ㄴ 것이다」「ㄴ 께」への変化もモダリティ形式から動詞活用の語尾へ変化するのである。(21)と(22)は動詞活用の「께」へ変化できない。したがって、「ㄴ는 것이다」より「ㄴ 것이다」のほうが文法化が進んでいると考えられる¹⁾。

以上のように、「것이다」は「것」に「이다」が付いて文法化した形式である。「것이다」も「のだ」と同様、具体的意味から抽象的意味へ、より機能的形式へ変化してきたと言える。

4.2 「のだ」と「것이다」の對應關係

「のだ」と「것이다」は通時的に文法化した形式であり、各形式の機能別に文法化の段階が異なることがわかった。「のだ」と「것이다」の文法化の度合いを比較するために、文法化の過程における「のだ」の機能に「것이다」が對應するか否かを明らかにする。

「のだ」の機能は、「名詞化の機能」→「文連結の機能」→「態度表明の機能」へ擴大している。このような「のだ」の各段階の機能と「것이다」の對應關係をみていく。

本稿では「魔女の宅急便」(日→韓譯)と「秋の童話」(韓→日譯)の日本語版と韓國語版を對象

1) 서정주(1978)も「ㄴ 것이다」は一語化しておると認めているが、「ㄴ는 것이다」は一語化していると認めていない。

とし、「のだ」と「것이다」の対応関係を分析する。「のだ」に「것이다」が対応しているか否かについての詳細を表に示す。

表 「のだ」と「것이다」の対応関係

スコープの「のだ」 (44例)		文連結の「のだ」 (639例)		態度表明の「のだ」 (217例)		合計
対応	非対応	対応	非対応	対応	非対応	
22例 (50%)	22例 (50%)	101例 (16%)	538例 (84%)	11例 (5%)	206例 (95%)	900例

「のだ」は900例、「것이다」は134例であった。「のだ」に「것이다」が対応しているものは134例しかなく、「のだ」に「것이다」が対応していないものは766例であった。「것이다」に比べ、「のだ」の使用数が顕著に多い。「것이다」のほうが「のだ」より使用制約が強いと考えられる。

「のだ」の機能ごとに分類した結果をみる²⁾と、「のだ」に「것이다」が対応している場合は、スコープの「のだ」は22例(50%)で、最も多かった。文連結の「のだ」は101例(16%)で、態度表明の「のだ」は11例(5%)であった。

以上のことから、文法化におけるいずれの機能においても、「のだ」と「것이다」が対応しており、類似しているといえる。しかし、スコープの「のだ」に「것이다」が最も用いられやすい。また、態度表明の「のだ」より、文連結の「のだ」に「것이다」が用いられやすい。態度表明の「のだ」に「것이다」が最も用いられないことが明らかになった。文法化が進むにつれ、「のだ」と「것이다」の相違点が目立つのである。

本稿では、「のだ」に比べ、「것이다」は文法化が進んでいないため、各機能の間に「것이다」との対応に差があると考えられる。

4.3 「のだ」と「것이다」の機能別必須性

機能によっては、「のだ」と「것이다」の必須性が異なる。名詞化の「のだ」<文連結の「のだ」<態度表明の「のだ」の順に「のだ」と「것이다」の必須性の差が大きいと思われる。「のだ」の各段階の機能と「것이다」の必須性を考察する。

まず、名詞化の機能である。名詞化の機能は動詞文・形容詞文を「の」によって、名詞化することで對比性を持たせる。次の例は名詞化の機能を持つスコープの「のだ」である。

2) スコープの「のだ」の用例が少ないのは話題の特殊性によるものである。名詞化の機能が持つ対立性の意味合いが明確な場面ではスコープの「のだ」が多く使用されており、必須性も高いと予測される。

- (24) ウンソ、たまにはここに來てるのか? もしかして、昨日ここに來てたのか?
가끔 이곳에 오는 거니? 은서야? 혹시 어제라도 여기 다녀간 거니?
- (25) 「あんたを責めているんじゃないの。」
지금 너 때문이라고 책망하는 게 아냐
- (26) はあ!! いけない! ごめん、ごめん!!
이런! 안돼! 왓 미안미안!!
許して、あなたの卵を狙ったんじゃないのよ!
용서해 줘. 네 알을 훔치려고 한 게 아냐!

(24)は「ウンソがここに來ている」という既定の事態を前提に、「いつ」に焦点が当てられている。「たまに」と「昨日」に焦点が当てられており、「のだ」と「것이다」が用いられている。命題の成立に関わる文要素に焦点が当てられており、それと對立する要素が否定されることで、話し手の伝えたいこと・知りたいことを適切に表現することができる。(25)と(26)は話し手の意図を適切に伝えるため、「のだ」と「것이다」が用いられている。聞き手が誤解される可能性のある部分を排除するのに、「責めている」と「狙った」に焦点を当てて否定し、他の事態が存在することを對比させている。このように、「のだ」と「것이다」はいずれも名詞化の機能を持っている。

しかし、兩形式の必須性が異ると思われる。(27)と(28)は情報を聞き出すため聞き手に質問する場合である。

- (27) 「いつやむのかな? ママ、心配してるだろうな・・・」
언제 그치지? 엄마 기다릴텐데...
- (28) 「どうして泣くの? お兄ちゃんがどうして泣くの?」
왜 울어? 오빠가 왜 울어?

(27)と(28)では「のだ」は必須であるが、「것이다」は必須ではない。(27)と(28)に「것이다」を用いると詰問のニュアンスを表すようになるため、用いないほうがいい。

スコープの「のだ」に「것이다」は對応しやすいが、スコープの「のだ」より「것이다」の必須性は高くない。

次に、文連結の機能を持つ「のだ」と「것이다」の必須性をみていく。名詞化の機能を持つ「の」、「것」によって、先行の部分を名詞化し、後行の部分と結びつけることができる。

- (29) テソクと自分はとても似合わないカップルだ。そんな彼が、自分のことを好きであることが不思議に思えた。しかし、ウンソはテソクの背景や外見に心を惹かれたのではない。もっと正直に言うと好きじゃない。テソクには申し譚ないが、ジュンソへの愛が許されることのない愛であるため、テソクを受け入れることによって、自分に歯止めをかけたかたので

す。許されない愛に向かう自分の暴走を止めたかったのだ。

사실 태석과 자신은 어울리지 않는 짝이었다. 그런 그가 자신을 좋아하는 것이 이상할 정도였다. 하지만 은서는 태석의 배경이나 외적인 조건 때문에 마음이 끌린 것이 아니었다. 더 솔직히 말하면 마음이 끌린 것도 아니었다. 태석에게 미안한 일이지만 은서는 태석에게 도망가고 싶은 것이다. 준서를 향한 사람이 허락될 수 없는 사랑이기에 태석을 받아들임으로써 자신을 막고 싶은 것이다. 허락되지 못할 사람을 향한 자신의 질주를 막고 싶은 것이다.

(29) ではウンソはテソクが好きでもないのに、付き合う理由について、そのわけを述べている。「のだ」も「것이다」も用いられている。

次の(30)は聞き手の間違っただけの考えを訂正させる場面である。

(30) 키키: あら、あんなに急かせたくせにいざとなったらぐずつくのね。

지지: 違うよ。旅立ちをもっと慎重に厳かに行うべきだと思うんだよ。

(30) 지지: 아냐. 여행은 좀 더 신중하고 엄숙하게 행해야 한다고생각 하는 거야.

지지는ぐずつくと言われたのに對して、「違う」と答えている。否定しているのと關係づけて、「旅立ち」に關する話し手の考えを述べて、わからせようとしている。

このように「것이다」も「のだ」と同様、名詞化の機能を擴大し、先行文脈や狀況とある事態を關係づける機能を持つ。

しかし、文連結の「のだ」に比べ、「것이다」の必須性の度合いは低いと推測される。必須性が高い文連結の「のだ」に「것이다」が對應しない例もみられる。

(31) (あるアパートに入って)

「ここ、わたしの部屋なの。」ジュンソは驚いた目でユミをみた。

「數日前にここに引っ越してきたんです。急いで引っ越そうとしたらここしか空いてなくて。

でも悪くないでしょう。ジュンソのアトリエからも近いし、學校からも近いし、

여기 내 아파트야. 준서는 놀란 눈으로 유미를 보았다.

이리로 옮겨온 지 며칠 됐어요. 급하게 옮기느라 제대로 고르지 못했지만. 괜찮죠? 준서씨 작업실하고도 가깝고, 학교랑도 가깝고.

(31) では誰のアパートであるか氣になっているジュンソに話し手ユミのものであることを提示し、それと關係づけて、「引っ越した」ことを具体的に説明している。「のだ」は必須であるが、「것이다」は必須ではない。

(32)はユミがいない狀況に對して、「ソウルに行った」という事情を説明している。「のだ」は

必須であるが、「것이다」は必須ではない。

(32) 車から降りたジュンソはベンチに座っているウンソに気づいた。ウンソを見た瞬間、ジュンソは息が詰まってしまった。

「ウンソ」은서야

「お兄ちゃん・・・ごめんね。ここまで来ちゃった。ユミさんは留守みたいね。」

오빠 미안해. ...여기까지 왔어. 유미 언니 없네

口元に笑みを浮かべながらウンソはカフェの方を見た。

입가에 미소를 띄우며 은서가 카페 안쪽을 보았다.

「あ、ソウルに行ったんだ。」

어, 서울 갔어.

以上のことから「のだ」による関係づけより「것이다」による関係づけのほうに制約が強いと考えられる。「のだ」の使用範囲が顕著に廣いのである。

最後に、最もモダリティ性が高い「話者態度表明の機能」を持つ態度表明の「のだ」と「것이다」の必須性をみていく。態度表明の「のだ」はほとんどの場合「것이다」が対応しない。特定の事態と関係づけるとは考えにくく、話し手の心的態度によって「のだ」の必須性は高いが、「것이다」の必須性はない例が多く見られる。

(33) 「俺はなとても凶々しいんだ。だから、どんなものでもお構いなしに、自分がほしいものなら何でも手に入れてしまうんだ。そして嫌いなものはぜんぶ他人に押し付ける。お前も俺に押し付けろ」

“난 어떡하면 좀 염치가 없어. 그래서 남들 상관 안 하고 나 좋은건 다 가져. 그리고 싫은 건 다 남한테 넘겨버리는 거야. 너도 남한테 넘겨라.”

(33) では話し手が聞き手が知りたい既定の事態を提示する場面である。「のだ」は必須であるが、「것이다」は用いられない。

(34) では話し手が「怖い」という既定の事態をことさらに提示しようとしている。

(34) 「・・・俺が現れなければ、ウンソは俺に会うために行き續けてくれるんじゃないかな？ テソク、俺、怖いんだ。どうにもできないほど怖いんだ・・・」

“.....내가 안 나타나면 은서 나 기다리느라 살아주지 않을까? 태석아. 나 무서워. 어떻게 할 수 없을 만큼 무서워.....”

「のだ」は必須であるが、「것이다」の必須性は低い。(34) で「것이다」を用いると、「心配しな

いから行かないのではなく、怖いから行かない」と解釈されやすい。つまり、「것이다」は話し手の心的態度を表す態度表明の機能ではなく、名詞化の機能が強く、對比性の意味合いを持ちやすい。

態度表明の「のだ」に「것이다」が対応する例はまれであるが、見られる。

(35) へこたれちゃだめよ。へこたれちゃだめ。キム社長のところに行かなくてすんだことだけ考えよう。やり直すのよ。あたしは何でもできるわ。

약해지지말자. 약해지지말자. 김사장한테 가지 않게 해 준 것만 생각하자. 다시 시작하는 거야. 무슨 일이든 할 수 있을 거야

(35)は話し手が「やり直す」が望ましいと自身に言い聞かせる場面である。ことさらに話し手の意志を提示するために「のだ」と「것이다」が用いられている。今後、聞き手を必要としない要因が関係しているかどうか検討する必要がある。

文法化におけるいずれの機能においても「のだ」と「것이다」は対応しており、類似しているが、いずれの機能においても「のだ」に比べ、「것이다」の必須性が低いことが明らかになった。

5. 「のだ」と「것이다」の文法化の度合い

「のだ」の文法化の過程における名詞化の機能、文連結の機能、態度表明の機能別に「것이다」の対応関係および必須性の違いを考察した。

文法化におけるいずれの機能においても「のだ」と「것이다」は対応しており、類似しているが、いずれの機能においても「のだ」と「것이다」の必須性が異なる。名詞化の「のだ」<文連結の「のだ」<態度表明の「のだ」の順に「のだ」と「것이다」の必須性の差が大きいことが注目される。文法化が進むにつれ、両形式の相違点が目立つのである。「것이다」より「のだ」のほうがモダリティ形式として発達していると考えられる。

「のだ」と「것이다」の使用条件が異なる原因は文法化の度合いに關係している。「のだ」は文連結の機能と態度表明の機能まで発達しているが、「것이다」は名詞化の機能が強く残っており、文連結の機能や態度表明の機能としてまだ定着していない。つまり「のだ」に比べ「것이다」は文法化が進んでいないため、使用制約が強いと考えられる。

本稿では「のだ」と「것이다」の文法化の度合いが異なるという指摘と関連するものに、堀江(1995)がある。堀江(1995)は「の」に比べると、「것」は文法形式・構文としての定着度が低く、完全に文法化していないと指摘している。「の」は實質的意味を持たないが、「것」は「もの」という意味を持つという違いが影響しているという。文法化の過程で完全に機能語になりきって

ない語彙項目の文法的機能が、元々の語彙的意味によって制約される現象から「のだ」より「것이다」のほうに制約があると推測される。

6. 今後の課題

「のだ」に對應する韓國語の形式について分析する必要がある。堀江(2002)は日本語の方は形式に多くの機能を持たせたり、逆に形式(コード)の持つ機能を十分に特定しないまま、實際の文脈の中でその形式に適切な解釋を行っていくというコードの經濟性(economy)というべき志向性が見られる。これに對して、韓國語の方は形式に担わせる機能を過不足なく限定しようとする同型性(isomorphism)というべき志向性が見られると述べている。「のだ」に「것이다」の他に對應する形式について分析し、日本語と韓國語のモダリティ体系における「のだ」に「것이다」の位置づけを明らかにしたい。

また、「것이다」が用いられた場合、「のだ」が對應しない例も見られる。今後、「것이다」に「のだ」が對應しない例を分析し、「것이다」の性質をさらに追求したい。

【參考文獻】

- ・ 김인주 (1996) 「'것'의 분포와 기능-통시적 고찰을 중심으로-」 『우리말연구』6, 한국어학회, p.179-216
- ・ 서정주(1978) 「'크 것'에 관하여 -'것'과의 대비를 중심으로-」 『국어학』6, 국어학회, p.85-110
- ・ 안주호(1997) 『한국어 명사의 문법화 현상 연구』 한국문화사
- ・ 이승녕(1975) 「중세 국어의 '것'의 연구」 『진단학보』39, 진단학회, p.105-138
- ・ 印省熙(2003) 「日本語の「のだ」と韓國語の「-ㄴ 것이다[n geosida]」の對照研究」お茶の水女子大學博士論文
- ・ 氏家洋子(1992) 「ノテス文の成立とその背景-日本語史との對話-」 『辻村梅樹教授古希記念日本語史の諸問題』 明治書院、p.554-572
- ・ 宋承姬(1998) 「文末における韓國語の「-것geos」と日本語の「の」の對照研究-「것이다geosida」と「のだ」を中心に-」 『廣島大學教育學部紀要』47、廣島大學教育學部、p.267-275
- ・ Narrog, Heiko(2002) 「意味論的カテゴリーとしての「モダリティ」」 『認知言語學：カテゴリー化』 東京大學出版社、p.217-251
- ・ 野田春美(1997) 『「のだ」の機能』くろしお出版
- ・ 堀江薫(1995) 「韓國語に主要部内在型關係節は存在するか? : 文法化(grammaticalization)の觀

点より』『KLS』15、關西言語學會、 p.90-99

- Horie, Kaoru, and kaori, Taira.(2002) “Where Korean and Japanese Differ: Modality vs. Discourse Modality” In: Akatsuka, Noriko, and Susan Strauss.(eds.), *Japanese/Korean Linguistics 10*. Stanford: CSLI[distributed by Cambridge University Press, 178-191
- Hopper, Paul J and Traugott, Elizabeth C (1993) *Grammaticalization*, Cambridge University Press
- Traugott, Elizabeth C (1998) Pragmatic Strengthening and Grammaticalization. *BLS14*, 406-416

【用例出典】

진명순(편) 『마녀 배달부』 2005 제이앤씨

宮本向寛(번) 『秋の童話』 2002 徳間書店

오수연 『가을 동화 I · II』 2001 생각의 나무

K C I

要 旨

「のだ」と「것이다」は構造的にも意味的にも類似しているが、「のだ」と「것이다」が對應しない例が多いことから、兩形式の使用條件の違いは異ると考える。本稿では「のだ」と「것이다」の使用條件の違いは兩形式の文法化の度合いに關係していると考ええる。

「のだ」と「것이다」は名詞化の機能、文連結の機能と態度表明の機能を共有するが、その必須性は異なる。名詞化の「のだ」<文連結の「のだ」<態度表明の「のだ」の順に「のだ」と「것이다」の必須性の差が大きいことが注目される。

「のだ」は文連結の機能と態度表明の機能まで發達しているが、「것이다」は名詞化の機能が強く残っており、態度表明としてまだ定着していない。「のだ」に比べ「것이다」の文法化が進んでいないため、使用制約が強いと考えられる。

「の」は實質的意味を持たないが、「것」は「もの」という意味を持つという違いが影響していると考えられる。文法化の過程で完全に機能語になりきっていない語彙項目の文法的機能が、元々の語彙的意味によって制約される現象から「のだ」より「것이다」のほうに制約があると推測される。

キーワード：「のだ」、「것이다」、文法化、機能語、必須性

투 고 : 2006. 2. 28
1차 심사 : 2006. 3. 11
2차 심사 : 2006. 4. 1

住 所 : (302-809) 대전광역시 서구 갈매동 352-15 갈마타운 동 101 호
電 話 : 010-2305- 5229
e-mail : pumpkin98@hanmail.net